

2009. 5. 23.

## 卒論を構想するために

*Tatsuo Adachi*

- I. 優れた卒論を作成するためには、先ず最初に、何を明らかにするのか（課題）、その課題をどのように明らかにしていくのか（論証）をデザインしなければなりません。
- II. 最初に、大まかなスケッチを1. はじめにで展開します。研究のテーマをとりあげた理由（問題意識とも言います）を簡単に述べます。次に、そのテーマが読者にとって初めて知る内容であったり専門的な領域であれば、最低限の基礎知識（キーワードなど）を共有するための若干の解説を行います。（必要がなければ割愛します）。最後に、各章ごとの概略（論証過程）を述べて、この論文の魅力を読者にアピールします。起承転結の起に相当します。簡潔を旨に、要約、重要なキーワード、論文の流れを説明し展開します。
- III. その後に、2. 3. 4.（4. を入れるかどうかは各人の判断に任される）と論理を展開します。起承転結の承と展にあたる箇所であり、いわゆる本論です。どの章（1. 2. 3. 4. の箇所）、どの節（卒論マニュアルで触れますが（1）（2）に相当する小見出しです）に論文の醍醐味となる独創的な論述や事例分析、統計資料などを展開するのか、骨組みをしっかりと組みます。2. 3. 4. の見出しのタイトルも重要で、この論文の色使い（特徴的な内容）が明確になるところです。繰り返し推敲します。また、使用すべき重要性の高い資料（グラフやデータ）をどこに使用すべきか、吟味し厳選して配置していきます。原資料を自分なりに加工して使用したり、オリジナルなデータからグラフや統計処理を作成しても、論文価値は高まります。しかし、1. はじめにで問題提起した仮説（これから論証しようとする課題）を2. 3. 4. へ論理をつないで導きだせるようにできているかどうか、いわば5. への橋渡しができているかどうかには主眼があります。この骨組みが軟弱であり羅列的だと散文になり論文としての価値は低くなります。総合的な知識と学力を動員して目に見えない汗をかく箇所です。
- IV. 5. おわりにでは簡単にこれまで展開してきた内容を要約して明らかになった点や研究の残された課題や感想を述べて簡潔に括ります。だらだらと書く必要はありません。
- V. 添付ファイルを参照してください。2004年度に、前任校で指導した当時の留学生の卒論です。A4版（1頁1330字, 38桁×35行）、約12,000字（表紙を含む16枚）で、これまで指導した中では比較的高水準の卒論でした。彼はその後、某私立大

学大学院に進学し、修士号を取得しています。修士論文も卒業論文の研究成果を基礎に発展させたそうです。どのような論文でも目次を見れば、その人間の構想力のレベルが一目瞭然となります。論文作成のプロセスで、目次の構成やタイトル、参考文献など指導教員と意見交換しながら練り上げたので、厳密にはすべての箇所が学生だけの作品という訳ではありません。しかし、これだけの完成度があるということは、相当な基礎学力を有していたとみなされます。今日とは違い、まだCSRの定説が確立していない4～5年前にCSRの理論に注目した論文です。

VI. この論文の優位性は過去の研究成果を踏まえつつも、自分なりのCSR論をオリジナリティあるものにしようと努力している点です。理論的な独創性はイマイチでしたが、引用されているデータや図表について、すべて自分自身で原資料を加工し作成している点が秀逸です。外国語文献の引用が翻訳に頼っていたり日本経団連や経済産業省の公的資料や見解などの引用が不足している弱点はありますが、参考文献も充実し読了して内容を十分に踏まえていましたので、卒論としては、90点の評価を与えました。

VII. このような論文を書くためには、まずしっかりした構想をもって、ゼミで行う数回のレジュメ形式の報告を充実させることです。このレジュメ報告が良い加減だと、最後まで、何を明らかにする論文なのか自分自身がわからず、また、興味をもてない研究になってしまいます。優れた卒論はどれだけ汗を流したかにもありますが、何よりも自分自身が「面白い、興味がある」テーマであることが研究動機を高め維持していく秘訣といえます。